

# A Report about the Class "Japanese Academic Writing I" for International Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kojima, Soichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00062734">https://doi.org/10.24517/00062734</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践報告

## 総合日本語技能別科目 「アカデミック・ライティングⅠ」の実践報告

小島 莊<sup>注1</sup>

### 要 旨

本稿は外国人留学生向けの総合日本語技能別科目である「アカデミック・ライティングⅠ」の授業概要についてまとめたものである。近年、外国人留学生の増加に伴い、留学生の日本語作文能力向上への要請が高まっており、この授業の履修希望者も増え続けている。筆者はすでに2016年度以前について、別稿にて実践報告書を書いたことがある。本稿はその後の2017年度から2020年度までを記したものである。この間、この授業はセメスター制からクォーター制へと全面移行し、授業課程に大きな変化が生じた。本稿ではその経緯、また2020年度にコロナ禍によって授業がオンライン化されたことなどについての概要もまとめている。

【キーワード】 アカデミック・ライティング、外国人留学生、作文能力、  
スーパーグローバル大学、クォーター制度

### I. はじめに

近年、日本では外国人留学生の数が増加している。2020年はコロナ禍のため例外的であったが、今後もこの傾向は変わらないものと思われる。金沢大学でも、平成26(2014)年度SGU(スーパーグローバル大学)創成支援事業の採択によって受け入れ留学生の増加が顕著となっており<sup>注2</sup>、平成22(2010)年度から平成26年度までの留学生数は490人前後を推移していたが<sup>注3</sup>、平成27(2015)年度から令和元(2019)年度までは数十人ずつ増加するようになり、令和元年度には666人に達した<sup>注4</sup>。令和2(2020)年度はコロナ禍のため、618人に減少しているが、大学はSGU創成支援事業が終了する令和6(2024)年度以降も国際化の動きを継続することを表明しており<sup>注5</sup>、今後もこの傾向は続いていくものと思われる。

正規留学生が増えてくることによって大きな問題となってくるのが、留学生の日本

語力の問題である。正規生であれば、講義やゼミなどにおける発表、授業で課されるレポートの作成、大学院生であれば学会での発表や論文の執筆など、アカデミックな日本語力が必要となる機会が多い。その中でも、とくに能力の強化が求められるのが作文能力である。作文能力は話力や聴力などと比べると、なかなか日常生活の中だけでは上達が難しく、とくにアカデミックなレポートや論文の作成となると、専門の教育が不可欠である。そうした中、アカデミック・ライティングの授業に対する要望は年々高まっており、履修希望者は増加し続けている。筆者が金沢大学に赴任した2015年春、アカデミック・ライティングは一人の教員によって週に二クラスが開講されていたが、秋学期からは筆者も担当することになり、二人で二クラスを開講するようになった。それでも履修希望者を全員受け入れることが難しく、抽選により次学期まで履修を待ってもらう学生が発生する学期もたびたびあった。

このことには、この授業の教育方針も大きく影響している。アカデミック・ライティングでは実践的な授業プログラムを実施しており、履修生は16回の授業の中で、複数回のレポートを書かなくてはならない。また、教員は履修生の提出したレポートを詳細にチェックし、日本語を修正、その後は個別面談を実施して再提出をさせる。つまり、課題となるレポートは一度提出して終わりではなく、履修生は書き直す中で自分の間違いを理解し、アカデミックな日本語における文章表現のパターンを獲得していくのである。このため、一クラスの履修人数には限界があり、最大で15人となっている。それ以上の履修生の提出物を、複数回にわたって詳細にチェックすることは一人の教員では時間的に困難であり、このため筆者を加えて二クラスを開講するようになっても、一学期に対応できる履修生は30人が限度であった。

2015年から2016年における「アカデミック・ライティングⅠ」の授業内容については、2017年に「留学生を対象とした『アカデミック・ライティングⅠ』の実践報告」(以後、「前稿」と記す)の中で詳述した<sup>注6</sup>。本稿では、その後のこの授業の変遷、とくにクォーター制度の導入に伴う授業プログラムの改変、また前稿でも扱ったが、この授業で実施している履修生へのアンケート調査の結果をまとめ、履修生の作文能力に対する自己評価や、授業に対する評価について考察していきたい。

## II. 授業の概要

本章では授業の内容(プログラム)について紹介する。主として、課題レポートのタイプとテーマ、授業の目的(履修生の養成能力)、授業スケジュールなどである。この授業の成立過程(各項目が現在のように設定された経緯)については、すでに前稿にお

いて詳しく述べているため、本稿ではとくに2017年以降の変更点について述べたい。また、2020年度についてはすべてがオンライン(オンデマンド型と同時中継型の併用)で実施されたため、その点についても簡単に紹介する。

## 1. レポートのタイプとテーマ

アカデミック・ライティングⅠでは、クォーター制度の導入前まで、一学期間を通じて三つのレポートを課題として書かせていた。書き直しによる再提出を含めると、履修生はこの授業で6回もレポートを提出しなければならず、履修生にとっても教員にとってもかなり内容の濃い授業であった。しかし、2020年春より、この授業は完全クォーター制に移行することになり、授業はアカデミック・ライティングⅠA(第1, 3クォーター)とアカデミック・ライティングⅠB(第2, 4クォーター)に分かれることになった(2019年春から授業名は既にクォーターごとに分かれていたが、実質的にはそれ以前と同じく全16回の授業形態であり、成績も学期末にまとめて両クォーターのものが出されていた)。

クォーター制度が導入されたことにより、各授業はそれぞれ全8回の独立した授業となり、学生には可能な限り両授業を連続して履修することが求められるものの、成績についても授業ごとに個別に算出されることとなった。ここで問題となったのが、それまで課題となっていた三つのレポート提出を、今後も継続していくのかという問題であった。

三つのレポートを二つの授業で実施することは困難であり、どうしても二つ目のレポートがクォーターを跨いでしまう。結果として、学生の養成能力が低下してしまうのではないかという恐れも危惧されたが、提出レポートは両授業で一つずつ(再提出も含め提出は2回ずつ)とし、それ以外に新たに短作文の提出課題を両授業の中に取り入れていくことになり、しばらく学生のレポート作成能力の様子を見て、改めてレポートの回数を見直していくこととした。

現在、授業で実施しているレポートのタイプとテーマは以下の通りである。

### (1) 論証型タイプ(レポート1とする。第1, 3クォーターで実施。)

レポート1では新聞記事をテーマとした課題レポートの練習が行われる。履修生は記事の内容を把握し、それに対する自分の考えとその理由を書くことを練習する。新聞記事の必要な箇所を適切に引用すること、そしてその内容について、同意と反論の表現を適切に使って自分の意見を書けるようになることが大きな目標である。また、ここでは日本語のアカデミックな文章における基本的な書式も身につけさせるため、レポートを書く上での基礎となる表現練習として「硬い表現の書き方」、「引用文の書き方」、「同意や反論の書き方」、「助詞、助動詞の使い方」、「接続詞の使い方」なども学習する。

さらに、履修生は自分の考えと理由を書くだけではなく、内容に説得力を持たせるために、その考えと理由をサポートする客観的な資料を自ら探し、適切に引用しなければならない。これはもともと三つのレポートを課題としていた時には、レポート1の課題範囲には含まれておらず、レポート1は自分の考えと理由を主観的に書くところまでで完成であった。三つ目のレポートで再び新聞記事をテーマとする論証型タイプのレポートを実施していたため、客観的な資料を自ら探し適切に引用する作業は、主としてこの時に学習していたのである。しかし、レポートが二つになったことにより、このレポート1で客観的な資料を引用するところまでが新たな課題範囲となった。ただし、これは一回目の提出時には課題となっておらず、その後の個人面談を通じて、どのような資料を引用するかの相談が実施された後、二回目の提出時に加筆し、最終的にレポート1を完成させる形式となっている(これは2020年度の春と秋に実施された形態であるが、オンラインという今までにない授業システムであったこともあり、これが最適な方法であったか、判断が難しい。今後、形式がさらに改変されていく可能性もある)。

## (2) 報告タイプ(レポート2とする。第2,4クォーターで実施。)

レポート2では「最近、売れているもの／売れていないもの」をテーマに、図表などの資料を自ら探してきて提示し、その内容を適切に説明する課題レポートの練習が行われる。これは報告レポートの学習であるが、こうした図表などのデータをアカデミックな表現で説明できる作文能力は、大学における研究だけでなく、日本で社会人生活を送ることになった場合にも有益な能力になるものである。履修生は図表について客観的に説明するだけではなく、その図表に見られる数値の変化(売り上げの増加や減少、複数のデータの比較など)について述べ、さらにその変化の要因についても自ら分析し、他の資料を引用して述べることが求められる。そのため、こうしたレポートの作成に必要な表現の練習として「図表の提示方法」、「定義や分類の書き方」、「変化を形容する表現」、「接続詞の使い方」、「文末表現の書き方」などを学習する。

また、このレポートでは、テーマとする図表を履修生の興味に従って自由に選ばせるが、それが適切なものであるかどうかはレポートを書き始める前に授業の中で教員がチェックし、不適切なものである場合には選び直しをさせる。近年ではインターネットを使って資料を探す履修生が多いため、アカデミックな信頼性のある資料とはどのようなものか、また、インターネットではどうやってそうした資料を探すのかについても、授業の中で解説と練習を取り入れている。

なお、このレポート2についても、一回目の提出までの課題範囲は図表の提示と内容の説明までで、変化の要因について分析し、別の資料を引用してそれを客観的に説

明する部分は二回目の提出での加筆となる。一回目の提出後に個別面談を実施し、要因の分析と引用する新たな資料について教員と相談する点は、レポート1と同様である。

## 2. 授業の目的(履修生の養成能力)と評価基準

授業の目的としてシラバスにも記載している履修生に期待する養成能力には、以下のようなものが挙げられる。

### (1) 文章を適切に引用し、自分の考えと理由を論理的に書くことができる力

これは主として大学の講義などでテーマ付きの課題レポートが出された場合の能力であるが、ここには当然ながら「テーマに関する情報を説明できる力」、「自分の論じたい点を見つけ出す力」なども含まれる。

### (2) レポートの中で、図表の内容を適切に説明することができる力

これは報告レポートの学習によって養成が期待される力であるが、この授業では「テーマに関連のある図表を自分で見つけ、適切に説明する力」に限定される。時間の制限もあり、授業の中では履修生に自らデータを集め、図表を作成させるところまでは扱えない。しかし、図表の説明方法を学ぶことによって、将来的に自分の研究をしていく際に、自分で図表を作成していく時の基礎力の一つにはなるものと考えている。

### (3) レポートを書く前に適切な文献や資料を探すことができる力

これはアカデミックな文章を書く時には極めて重要な能力であり、レポート1でもレポート2でも学生に課しているテーマである。文章が主観的な内容に陥ってしまわないよう、客観的な関連文献や資料を見つける力、またその文章を適切に引用する力はレポートや論文においては必要不可欠な能力である。

### (4) レポートで使われる基本的な表現力と構成力

これはまさに基礎力であるが、外国人留学生に対してはアカデミックな日本語における基本的なルールを一から教えることが重要である。例えば、「指定された枚数あるいは字数内にまとめる力」や「参考文献や引用文献を正確に記載する力」など、常識の範疇とと思っていることでも来日したばかりの留学生には理解できていないことも多い。基本的なルールを学習しながら、同時に高度な文章表現も学んでいく点は、日本人学生が学ぶ授業とは異なる日本語教育(高度な技能別クラス)の特徴とも言える。

なお、授業成績の評価基準については、2020年度現在は次の通りとなっている。

- (1) レポートの評価点：70%
- (2) 平常点(授業への貢献，課題などの提出物)：30%

これはクォーター制度に完全移行した2020年春からのクォーターごとの評価基準であり、レポートの評価点(70%)は、各授業の最後で最終的に完成原稿として提出する二度目のレポート提出に対する評価点のことを意味する。一方、レポートの一回目の提出や、その他の短作文などの毎回の提出課題は、平常点(30%)の中に加えられる。2019年度までは学期を通して授業成績を評価していたため、レポートにも三つの種類があり、評価はより複雑でレポートごとに配点に差を付けていた。

- (1) レポートの評価点：60%(レポート1：15%，レポート2：20%，レポート3：25%)
- (2) 平常点(その他の課題類の提出点)：30%
- (3) 出席点：10%

しかし、学期を通して成績を出すため、授業名がクォーターごとに分かれて以降も、二つの授業にまとめて同じ学期で出された成績が付けられるという状態が続いていた。2020年度から完全移行したことにより、レポートはクォーターごとに一つとなり、成績もそれぞれの授業で独立して出されることになったため、履修生の成績も、クォーターによって異なる評価が出されることが可能となった。また、「出席」そのものが評価には含まれないことが決まり、現在はレポートの評価割合が70%となっている。

各レポートは、以前からループリック方式によって評価されていたが、この方法は現在も変わっていない。評価項目には「内容」、「正確さ」、「表現」、「形式」があり、それぞれ「レポートの内容が目的に合っていて、説得力のあるものになっているか」、「日本語が正確に書けているか」、「レポートにふさわしい表現を使っているか」、「レポートの形式を守って書けているか」を基準として、各レポートのテーマに合わせた細かな配点が設定されている。参考資料として、本稿の末尾に2020年度第3クォーターで使用した「レポート1の評価票」を示しておく。

### 3. 授業スケジュールとオンライン化

授業のスケジュールも、クォーター制度への完全移行化で大きく変わったところである。すでに述べたが、学期を通じた全16回制で実施していた2019年度までは、授業名がクォーターごとに分かれた後も、全16回で三種類のレポートを課すスケジュールで実施されていた。すなわち、クォーターを跨いでそのまま授業内容が継続されていたので、実質的に第2，4クォーターから新たな学生が履修することは不可能な状態であった。しかし、2020年度からは課されるレポートは一つのクォーターで一つとなったため、クォーターごとの授業は独立しており、成績もそれぞれで個別に出され

るようになった。つまり、学生には可能な限り連続して履修することを求めているが、第2, 4クォーターから履修を開始することも不可能ではなくなった。このことは、今後、仮にどちらかのクォーターの授業で単位を取得できなかった履修生が発生したとしても、次の学期以降で、そのクォーターの授業だけを再履修し、単位を取得することが可能になったことを意味している(ただし現在まで、中途放棄した者を除いて、単位を取得できなかった履修生はいない)。

学期を通じた全16回制の授業スケジュールについては、前稿で詳しく述べたので、本稿では変更点を中心に、現在のクォーター制での授業スケジュールについて紹介したい。クォーターごとの両授業のスケジュールを以下の表1に示している。なお、これは2020年度のコロナ禍によるオンライン授業の実施とも重なったため、この点についても述べる。

表1.2020年度(第1～4クォーター)における授業スケジュール

回	主題	内容
第1, 3クォーター		
1	はじめに	ガイダンス・レポートの基礎知識 表現練習「教科書2課, 作文の基本(硬い表現)」
2	レポート1	テーマ新聞記事の紹介と解説(話し合い) 表現練習「接続詞+そのような働きをする言葉」
3	レポート1	レポートのメモの確認(論じるポイントを決める) 表現練習「教科書11課, 引用」
4	レポート1	記事の内容確認(履修生からの質問などについて) 表現練習「教科書12課, 同意と反論」
5	レポート1	レポートの一回目の返却, 全体フィードバック, 個別面談
6	レポート1	引用文献(資料)の探し方, 載せ方 表現練習「教科書14課, 結論の提示」
7	レポート1	表現練習「接続詞+そのような働きをする言葉2」 表現練習「文末表現の書き方」
8	レポート1	レポート1の最終フィードバック(全体) レポート2に向けての説明(インターバル中の準備)
第2, 4クォーター		
1	レポート2	ガイダンス・レポート2のテーマ解説(話し合い) 表現練習「教科書5課, 定義と分類」
2	レポート2	レポートのメモの確認(報告する図表を決める) 表現練習「教科書6課, 図表の提示」
3	レポート2	表現練習「教科書7課, 変化の形容」 表現練習「教科書8課, 対比と比較」
4	レポート2	表現練習「教科書10課, 列挙」 表現練習「助詞+そのような働きをする言葉」
5	レポート2	レポートの一回目の返却, 全体フィードバック, 個別面談
6	レポート2	引用文献(資料)の探し方, 載せ方 表現練習「文末表現の書き方2」
7	レポート2	表現練習「助詞+そのような働きをする言葉2」 表現練習「文末表現の書き方3」
8	レポート2 (まとめ)	レポート2の最終フィードバック(全体) 学習のふり返り(アンケート・自己評価票の記入)

注1: 進行状況によって、クォーターにより内容には差異がある。

まず、表内の言葉について説明しておく、教科書と呼んでいるものは、アカデミック・ジャパニーズ研究会編著の『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』である<sup>注7</sup>。この授業ではこれまで、教科書として本書を使用してきており、履修生には購入を求めている。履修生にも好評で、短期留学生の中には、帰国時に本書を持ち帰る者がほとんどだと聞いている。また、他にも表現練習の学習などに用いる本として、友松悦子の『小論文への12のステップ』<sup>注8</sup>、小森万里他の『ここがポイント！ レポート・論文を書くための日本語文法』<sup>注9</sup>、深澤のぞみ他の『21世紀のカレッジ・ジャパニーズ 大学生のための日本語で読み解き、伝えるスキル』<sup>注10</sup>、二通信子他の『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』<sup>注11</sup>なども適宜使用している。

もともとこのアカデミック・ライティングでは、各レポートの作成作業は「テーマの紹介と解説」、「テーマに関する話し合い」、「レポートに必要な表現の練習」、「履修生のメモ作成(レポートで取り上げるポイントの設定)」、「一回目の提出」、「返却とフィードバック(全体と個別面談)」、「二回目の提出」、「評価と最終フィードバック(全体)」という流れで展開してきた。スケジュール調整によって若干の前後はあるが、現在も基本的にこの流れは変わっていない。履修生は基礎的な知識を学びながら、それぞれのレポートのテーマについて自分なりの興味あるポイントを見つけ出し、メモなどを作成しながら履修生同士、あるいは教師との話し合いによって内容を深化させていく。

ただし、2020年度は「話し合い」の部分で大きな変化が生じた。基本的にこの授業では、これまで教室での授業時間は話し合い(質疑応答)や、対面での表現練習の場であると認識されてきた。レポートなどの文章の作成は、各履修生が授業以外の時間を使って行わなければならないものであり、それは教員による履修生の提出レポートの添削や、そうした添削物や評価票を履修生各自が修正・復習する時間についても同様である。せっかく教室に多くの人間が同時に滞在している授業時間というものは、個人の作業に使うのではなく、できるだけ他人との話し合いや教員との質疑応答に使うべき時間であるという認識が、このアカデミック・ライティングという授業がこれまで続けてきた授業方針であった。ところが、コロナ禍により、2020年度はそうした教室での対面授業ができなくなってしまったのである。

まず、2020年度の春学期は、日本語科目の全体方針として、第1クォーターはオンライン授業を中心とし、第2クォーターからは様子を見て可能なら教室での対面授業も取り入れていく(定期試験など必要に応じて教室で実施する)という決定がなされた。これを受けて、アカデミック・ライティングの授業でも、初回からオンラインでの授業が実施された。しかし、この授業では定期試験がないため、結局、第2クォーター

の授業も含め、教室での授業が実施されることはなかった。これは一つには、履修生の多くが対面授業を望まなかったことが理由として挙げられる。日本語科目には短期留学生(交換留学生)も多く参加しており、彼らは秋学期前に来日して春学期終了後に帰国する者が多い。よって、彼らの多くにとって第2クォーターが日本での最後の授業期間となる。帰国を目前にした外国人留学生が、コロナウィルスへの感染リスクのある教室での対面授業を望まないことは、当然のことであった。しかし、この春学期の学生は全員が金沢に滞在している学生であったため、オンライン授業にはzoomなどを使用した同時中継型の授業が多く実施された。そのため、教室での対面授業ほどの活発な話し合いはできなかったものの、パソコン画面を通しての、レポートテーマに関するある程度の話し合いや質疑応答は実施することができた。

続く秋学期になると、状況はさらに悪化した。大学全体で見ると、第3クォーターからは日本人学生向けの授業では教室での対面授業が再開されるものも多かったが、留学生向けの日本語科目では、オンライン授業が継続された。とくに留学生の場合は、先述したように秋学期から来日して留学生生活を開始する者が多いが、コロナ禍により日本に入国することができず、母国から参加する学生が急増したのである。このため、日本語科目全体の方針として、新たにオンラインでも同時中継型の授業はなるべく実施しないという方針が加えられた。時差の関係により、世界各国の履修生が日本時間に合わせて同時にオンライン授業に参加することは困難なためである。同時中継型の授業を実施する場合にも、それを強制とせず(参加できなくても欠席にはしない)、成績評価にも加えないことが求められた。アカデミック・ライティングの授業にも海外から参加する履修生がおり、履修生へのアンケートからオンデマンド型を望む声が大きかったため、秋学期にはzoomを使った同時中継型の授業は実施せず、オンデマンド型のオンライン授業のみで課程を進めていった。こうして、テーマに関する話し合いという、この授業本来の重要な要素が2020年度秋学期には授業の中から消えてしまったのである。(ただし、学生と教員の個別面談は、一回目のレポートの返却後にzoomを使って実施され、これまでと同様に書き直しや、新たな資料の選定などについての相談が行われた。また、メールなどを使った履修生と教員との間での質疑応答も随時実施された。)

今回、クォーター制への移行と、授業のオンライン化が同時に実施されたことは、まったくの偶然だった。そのため、クォーター化されたことによる課題レポートの減少に伴う学生の作文養成能力の変化と、オンライン授業の実施による教室での話し合いの時間が失われてしまったことに伴う学生の授業に対する認識の変化は、本来は分けて考えなければならない問題である。しかし、現実には同一年度内でのことである

ため、なかなか明確に分けることが難しい。次章で詳しく述べるが、この授業では学期末に履修生に細かなアンケート調査を実施しており、その中で自身の作文能力の変化に対する自己評価や、授業内容に関する評価をしてもらっている。今までのところ(2020年度秋学期に関しては、本稿執筆時点でまだ授業継続中のため、アンケートは実施されていない)、こうしたアンケート結果に2019年度以前との大きな違いは出ていない。また、学生が完成させたレポートの内容に、以前よりも質が低下しているなどのマイナス要素は見られない。しかし、コロナ禍が収束し教室での授業が可能となり次第(これにはもちろん、外国人留学生がみな安全に来日することが可能となる環境が求められる点で、日本人向けの授業とは条件が異なる)、この授業の重要な要素である話し合いは再開させたいと思っており、クォーター制の導入に伴う学生の作文能力の変化に関する評価は、その後、一定の期間が経過するまでは正確な判断は下せない。少しでも早く、通常の授業形態が戻ることを祈るばかりである。

### Ⅲ. アンケート調査と学生の自己評価

先述したように、アカデミック・ライティングでは毎学期末に受講生に対してアンケート調査を実施している(2020年度からクォーターごとに独立した授業となったが、2020年度秋学期現在までのところ、すべての履修生が一学期間を通じて授業を履修しているため、アンケート調査は学期末、すなわち第2、4クォーターの最後に実施している)。授業の内容、とくに課題のテーマに対する興味の度合いや難易度、日本語力の向上に役立ったかどうかについて学生の意見を収集している。また、初回と最終回の授業で自己評価票を記入させ、一学期間を通じての成長と達成度を自己評価させている。2015年度から2016年度のものについては、すでに前稿で詳しく述べているので、本章では2017年度以降におけるこのアンケート調査の結果を集計し、これに基づいて前稿のデータとも比較しながら、この授業の課程について考えてみたい。

#### 1. アンケート調査

学期末のアンケート調査では、主として実施した3回のレポート(2020年度は2回)について、履修生に「難易度はどうだったか」、「日本語力向上に役立ったか」、「興味は持てたか」の各項目について、5段階評価で回答してもらっている。

それぞれの項目における履修生の5段階評価の平均値を示したものが以下の表2である。平均値は小数点以下第3位を四捨五入したものであり、5段階評価では5が最大値(難しかった、役立った、興味を持てた)、1が最小値(簡単だった、役に立たなかつ

た、興味を持てなかった)となっている。データは2017年度春学期から2020年度春学期までの7学期間分を集計している(2017年度春学期：10人，2017年度秋学期：16人，2018年度春学期：12人，2018年度秋学期15人，2019年度春学期：15人，2019年度秋学期：14人，2020年度春学期：15人，合計97人)<sup>注12</sup>。

表2. アンケート調査の結果

	難易度	日本語力の向上に役立った	興味
レポート1	3.12	4.35	3.56
レポート2	3.26	4.38	3.95
レポート3	3.52	4.51	3.83

注1：2020年度秋学期は本稿執筆時点でまだ学期中であり、アンケート調査を実施していないため、含まれていない。

注2：レポート3は2020年度からは実施していないため、2020年度の調査項目には含まれていない。

このアンケート結果からみて分かることは、レポートの難易度については多くの履修生が「適切だ」と感じていることだ。2019年度まで実施していたレポート3については、少し難しく感じた者もいたようだが、これは学期末における三種類のレポートの総まとめのような位置付けであったため、そうした評価になることは当然だったと言えよう。

日本語力の向上に役立ったか、という質問項目について見ると、どのレポートも高評価を得ており、履修生にとってレポート作成能力の向上を実感できる内容になっているものと思われる。また、この表には載せていないが、レポートに役立つ表現練習を学習できたかに関するいくつかの質問でも、4.5前後の高い数値が出ており、日本語でアカデミックな文章を書くための基本的な文法と表現の学習が培われていることが分かる。

興味を持たたかどうかについては、いずれのレポートも3点台後半で、興味を持った人がやや多かったような結果となっている。その中でもレポート2は、テーマとする図表を各履修生が自由に選ぶことができるシステムであるため、最初からテーマが決められている他のレポートと比較すると、毎学期、履修生の評価は高くなる傾向がある。自分が興味のあるものを自由に選べるというおもしろさが、評価の差に出ているものと思われる。他のレポートでも、履修生がテーマを自由に選択できるようになればいいのだが、現在の詳細なチェック(添削)システムの質を維持するためには、論証型タイプのレポートのテーマを完全に自由選択にしてしまうことは困難である。

最後に、前稿で集計した2015年度から2016年度までのアンケート結果と比較すると、ほぼ変化がなく、同じ評価傾向が続いていることが分かる。レポート1については難易度「3.05」、役立ち「4.29」、興味「3.61」であった。また、同順でレポート2は「3.21」、「4.40」、「3.86」、レポート3は「3.57」、「4.49」、「3.72」であった。今後、クォーター制

の定着により、レポート1と2だけに関する評価が蓄積していくことになるが、そうした中で、評価に対する変化が見られるようになるかどうか、注目していきたい。

## 2. 履修生の自己評価

初回(第1, 3クォーターの初回)と最終回(第2, 4クォーターの最後)の授業で学生に記入してもらっている自己評価は、主として以下の項目により実施されている。これらの項目について、学生には4段階でその時点での自分の力を自己評価してもらう。

- (1) 日本語のレポートの形式を使って書くことができる。
- (2) 日本語の語彙、表現、文法を正しく使って書くことができる。
- (3) テーマに合った適切な資料を探すことができる。
- (4) 本や新聞などの文章を正しくレポートに引用することができる。
- (5) 図表を適切に説明することができる。
- (6) 自分の考えと理由をわかりやすく書くことができる。

以下、この自己評価の結果(各項目への自己評価が、学期の始めと終わりでのどのくらい変化したか)の集計を表3に示した。自己評価は4段階で4を最大値(できる)、1を最小値(できない)として初回の授業時と最終回の授業時に評価してもらうが、表中の「変化なし」というのは自己評価の数値に変化がなかった人の数を表している。また、「1段階上昇」は1から2へ、2から3へなど自己評価の数値が1段階上昇した人の数、同様に「2段階上昇」は2段階、「3段階上昇」は3段階上昇した人の数をそれぞれ表している。これについても、本稿では2017年度春学期から、2020年度春学期までを集計した。2016年度以前のは前稿に掲載されている。

表3. 履修生による自己評価の数値の変化

	変化なし	一段階上昇	二段階上昇	三段階上昇
(1) レポートの形式	10	36	39	12
(2) 語彙・文法・表現	22	58	13	4
(3) 適切な資料の探し方	8	51	20	18
(4) 正しい引用方法	5	41	45	6
(5) 図表の説明	7	19	51	20
(6) 自分考えと理由を書く	20	47	22	8

注1：各学期の履修人数などは、表2と同じである。

表の結果から明らかなように、極めて多くの履修生が自分の作文能力が向上していることを実感していることが分かる。とくに(1)(3)(4)(5)の各項目については、およそ9割を超える履修生が一段階以上の上昇を答えている。この傾向は前稿において集計し

た2015年度から2016年度における自己評価の時にも同様であった。

一方、(2)(6)の項目において、その他の項目と異なって自己評価に変化がない履修生が多いのは、この授業の履修生がもともと高い日本語能力を持っていることと関係があると言える。確かに、中には「1(できない)から1」へ、あるいは「2(あまりできない)から2」へと自己評価し、自分の能力があまり成長していないと感じている履修生もおり、これに関しては、今後のこの授業の改善点として考慮していかなければならない。しかし、変化の見られない履修生の中には、「4(できる)から4」への自己評価の者も一定数存在し、すなわち彼らは最初から自分の語彙力や作文能力に自信を持っていて、初回の自己評価の段階で、すでに最高評価の4を選択しているのだ。このため、結果として最終回の自己評価との間に、数値の変化は見られなくなってしまふ。ただし、中には最終回の自己評価の時に、初回で4を選択していた自分の自己評価を2や3に書き直して、最終回の自己評価を4としたり、あるいは評価の選択肢が4までしかないにもかかわらず、自分で勝手に5という選択肢を書き加えて初回で選択した4よりも上昇していることをアピールしたりする履修生も存在する。これはアンケート調査の正確性から考えれば問題もあるが、そもそもこれは自己評価であり、客観性のある評価ではないことから、履修生が自分の能力の向上を実感している証左として、この集計では上昇したケースとして集計した。

逆に(4)や(5)などにおける文献(資料)の引用や図表の説明などの項目に関しては、これまで日本語で経験したことがない者が多く、初回での自己評価は低くなる傾向が見られる。すると最終回での自己評価では、初回よりも高い自己評価が選択される可能性が高まり、結果的に変化なしという傾向は出にくくなるものと考えられる。

履修生の自己評価に限らず、実際に提出レポートのチェックをしている教員から見ても、履修生の作文能力の向上は実感として感じられるものである。レポート1の一回目の提出時点での内容と、2019年度まで実施されていたレポート3の最終提出時点での内容を比較すると、ほとんどの履修生に成長が見られ、中には同一人物の文章とは思えないほど、書き方がアカデミックなものに改善されている場合も少なくない。履修生は何度ものレポート提出と書き直しを繰り返すことで、確実に作文能力が向上していると言える。その点で、2020年度からレポートが二つとなったことが、履修生にどのような影響を与えるのか、今後もより注意深い観察が必要であると考えられる。2020年度の履修生に関しては、先述したように完成したレポートに大きな質の低下などは見られないが、まだ一年だけで結論を出すのは時期尚早であると思われる。今後も、履修生の自己評価も含め、細かく様子を見ていきたい。

## IV. まとめ

本稿では、外国人留学生の作文能力の向上を目的として、とくに上級者レベルの日本語力を持つ留学生が、アカデミックなレポートや論文を作成するために必要な基礎的な能力を養成するアカデミック・ライティングⅠの授業に関する実践報告を行った。また、授業内で実施しているアンケート調査や履修生の自己評価の結果から、この授業がこれから日本語でレポートや論文を書こうとしている留学生にとって、基礎的な力が身につく有益な授業となっていることを確認した。

しかし、自己評価はあくまでも自己評価であり、それぞれの履修生の客観的な作文能力を示すものとは言えない。授業で書かれた課題レポートも、あくまでも授業用のものであり、実際にゼミや学会のために書かれるアカデミックな文章とは異なるものである。この授業では、様々な専門分野の学生が同じクラスに参加するため、すべての分野のアカデミックな書き方を個別に学習することはできない。授業で扱うことができるのは、本当に基本的な形式だけであり、そこから先の専門分野での書き方は、各学生が自ら学んでいくしかない。しかし、外国人留学生が増加している現状では、こうした授業の存在は、これからもますます需要が高まっていくものと思われる。

現在、金沢大学では附属図書館の活動を中心として、ライティングセンター設立への動きが始まっている<sup>注13</sup>。これは学生がレポートなどを作成する際に、そのアカデミックな文章の作成をサポートする組織であるが、現時点では英語で書かれるものを対象とした活動に限定されている。しかし、将来的には日本語で書かれるものも含め、外国人留学生にもサポートの手が広がるセンターとなっていくことを期待したい。アカデミック・ライティングの授業だけでは、大学全体に何百人も在籍するすべての外国人留学生の日本語作文能力を向上させることはできない。様々な方法を駆使して、留学生全体の日本語力を高めていくことが、今後も留学生数を増加させていく大学として、必要であると考えられる。

### 【注】

1. 金沢大学国際機構
2. 金沢大学はスーパーグローバル大学(SGU)創成支援事業の一環として、事業開始から10年で全学生に占める留学生の割合を20%(約2,200人)とする目標を立てている。コロナ禍の発生などもあり、この目標の実現は困難な状況だが、留学生が増えつつある現状は今後も続いていくことが予想される。『平成26年度スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」構想調査【タイプB】』<[http://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/concept/sgu\\_chousho\\_b05.pdf](http://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/concept/sgu_chousho_b05.pdf)>(最終閲覧日:2021年2月3日)
3. 「国際交流実績-外国人留学生受入状況」『金沢大学概要2014』<<https://www.kanazawa-u.ac.jp/overview/18220>>(最終閲覧日:2021年2月3日)

4. 「国際交流-留学実績 外国人留学生受入状況の推移」『金沢大学概要2019』  
 <<https://www.kanazawa-u.ac.jp/overview/69623>> (最終閲覧日：2021年2月3日)
5. 金沢大学SGU(スーパーグローバル大学)関連KU-GLOCS「自走化計画」  
 <[https://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/concept/ku\\_sgu\\_jisoka.pdf](https://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/concept/ku_sgu_jisoka.pdf)> (最終閲覧日：2021年2月3日)
6. 松田佳子・小島荘一「留学生を対象とした『アカデミック・ライティングⅠ』の実践報告—レポート作成の実態に基づいた授業デザインとその評価—」(『外国語教育フォーラム』第11号, 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系, 2017年3月)
7. アカデミック・ジャパニーズ研究会編著(2015改訂版)『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』アルク
8. 友松悦子(2014第6刷)『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
9. 小森万里他(2016)『ここがポイント！ レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版
10. 深澤のぞみ他(2018)『21世紀のカレッジ・ジャパニーズ 大学生のための日本語で読み解き, 伝えるスキル』国書刊行会
11. 二通信子他(2015第5刷)『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
12. 2017年度以降2020年度まで, アカデミック・ライティングⅠのクラスは筆者一人による一学期一クラスだった時期と, もう一人の教員を含めた一学期二クラスだった時期がある。今回のデータ集計では, 全期間を通じて筆者の担当する一クラス分だけを集計した。
13. 「金沢大学附属図書館におけるライティングセンター機能の実装に関する申し合わせ」(令和2年10月1日, 図書館委員会承認) <<https://library.kanazawa-u.ac.jp/files/kitei/WritingCenter.pdf>> (最終閲覧日：2021年2月3日)

<参考資料>2020年度第3クォーター<レポート1の評価票>

／16点

	内容	正確さ		表現	形式
5	自分の立場とその理由が分かりやすい。独自性がある。疑問点がない。	正確で, 意味がよくわかる。意味不明な箇所がない。	3	引用や同意／反論, 硬い表現をほぼ適切に使っている。	タイトル, 名前, 見出しがある。タイトルを見出しは太字になっている。適切に段落を作っている。
4	自分の立場とその理由が分かりやすい。疑問点がない。	一部正確ではないが, おおむね意味が分かる。意味不明な箇所がない。	2	一部, 引用や同意／反論, 硬い表現を使っていないが, おおむね適切に使っている。	1つ不足している点があるが, 他はできている。
3	自分の立場とその理由の一部が分かりにくい。一部疑問点がある。	あまり正確ではないが, なんとか意味は分かる。一部, 意味不明な箇所がある。	1	引用や同意／反論, 硬い表現を適切に使っていない点が目立つ。	1つ以上不足している点があるが, 一部できている。
2	自分の立場とその理由に分かりにくいところが多い。いくつか疑問点がある。	正確ではなく, 誤りが目立つ。意味不明な箇所がいくつかある。	0	引用や同意／反論, 硬い表現を全く使っていない。	タイトル, 名前, 見出しがない。適切に段落を作っていない。
1	自分の立場とその理由に分かりにくいところが多い。いくつか疑問点がある。	正確ではなく, 誤りがかなり目立つ。意味不明な箇所がいくつかある。			
0	自分の立場とその理由がしっかり書かれておらず, 説明不足。疑問点ばかり。	不正確で意味が全く分からない箇所がほとんどである。			

# **A Report about the Class "Japanese Academic Writing I" for International Students**

KOJIMA Soichi

## **Abstract**

The number of international students at Kanazawa University is increasing every year, and the necessity of improving the international students' Japanese writing skills, especially skills in writing reports in university classes is also increasing. In this paper, the author describes the outline of the Class "Japanese Academic Writing I" during four years, from Spring Semester 2017 to Autumn Semester 2020.

In this class, a questionnaire survey is carried out among the international students every semester, to reveal their actual situation of writing reports. The survey's result shows that the students realize their basic skills to write reports, for example, how to quote information, how to write one's opinion, how to explain some figures or graphs, have improved.

**Keywords:** Japanese academic writing, International students, Writing skills,  
Super global university, Quota system